

## 研究ノート

### 合理化のパラドクスをめぐる覚書

吉田 竹也

#### キーワード

合理化の多義性、パラドクスの脱パラドクス化、異質な合理化のぶつかり合い

#### 1. 序 ヴェーバーの合理化概念

本稿は、マックス・ヴェーバーの「合理化」概念の理論的展開の可能性を、「合理化のパラドクス」という論点に焦点を当てて考察・整理しようとする覚書である。なお、この論考は、インドネシアのバリと日本の沖縄を事例とした、楽園観光地における観光と宗教の合理化について考察しようとする中期的研究の一環をなすものであり(吉田 2013, 2016a, 2016b, 2016c, 2016d)、民族誌的研究への接続を念頭におきつつ、その前段における一般理論的整理を目指したものである。

まず、出発点として、拙論の議論を整理しつつ、ヴェーバーの「合理化」の含意を確認しておく。拙論では、「合理化」を、ローカルなものが脱埋め込みによってより一般性を獲得し、社会・民族・地域・時代の差異をこえて有用性が認められ適応され、またそれらの差異に応じて改編されていくことである、とさしあたり定義した。矢野は、ある生活の領域の理論的・実践的な態度決定をある方向に首尾一貫させることが「合理化」であって、この概念は何らかの普遍的な傾向性の具体的特徴を言い当てたものではなく、仮想の共通変数の名称である、とする。私も、こうしたいわば一種のゼロ記号としての、形式論的な「合理化」概念の定義に基本的に同意する(矢野 2003: 31-36, 45-62; 吉田 2016d: 302)。ここで「基本的に」という留保を付したのは、合理化のパラドクスという論点を加味して考察すべきであると考えられるからであり、まさにこれこそ本稿の主題となる。

ヴェーバー自身は、合理化とその多義性に諸論考の中で触れていたが、最終的な概念の確定にいたらないまま世を去った。そして、一部には論理的にたがいに相容れない議論も残すこととなった。とくに、『職業としての学問』では、「合理化」を、脱神秘主義あるいは呪術の園からの解放、予測可能性とそのことへの信頼、それを支える技術と学問の発展、といった点に見て取る一方、『宗教社会学論集』<sup>1</sup>では、アジア地域における呪術の徹底と

<sup>1</sup> 『宗教社会学論集』は全3巻からなる。ヴェーバーの生前には第1巻のみが出版された。そこには、「序言」、「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」、「プロテスタンティ

いう方向の合理化や<sup>2</sup>、近代西欧におけるカルヴァン派の来世の予測可能性を遮断する方向での合理化を、取り上げている。別言すれば、前者では知性化としての合理化が、後者では反知性化としての異なる合理化の方向性が、それぞれ合理化の具体的なあり方として俎上に上っているのである(ヴェーバー 1972a (1920-1921), 1972b (1920-1921): 80-83, 1972d (1922): 49, 1980 (1919): 32-33, 1988 (1951/1922/1903-1906): 132-137, 1989 (1920), 2009 (1921): 482-497)。

かくも対照的な合理化論が提起されており、また、先行研究では前者の合理化がヴェーバーの合理化の一義的な含意であると理解されているのだが、私は、「主観的意味の理解」というヴェーバーの解釈学的認識ないし公理と歴史研究の視角とに鑑みて、さまざまな社会的領域つまり諸システムがそれぞれの合理化の過程にあるとともに、複数の主体にとって意味あるそれぞれの合理性がいわばせめぎ合い、さまざまな歴史的経緯や因果連関から、ある合理化が他の合理化を圧倒したり凌駕したりしつつ支配的となっていく状況を観察することがありうる、というのが、ヴェーバーの合理化論の趣旨であったと考えている。先に述べた形式論的な合理化概念の定義の水準とはまた別の水準において、合理化は、相互主観的なまなざしによって解釈・構成される様相として理解されるべきものなのである。その場合、重要なのが、ある主体のまなざしからは合理化と捉えられるものが、別のまなざしからは非合理化と捉えられることがありうる、という点である。合理化は、このいわば背中合わせの相反する含意あるいは意味の様相を内包した概念であるがゆえに、一見すると相矛盾するような合理化の具体的なあり方がヴェーバーによって取り上げられることになったのだと考えられる(吉田 2016d: 302-303)。これが、先にパラドクスと述べた問題の出発点となる。

いま述べた点は、初版(1905年)の「プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神」にたいするブレンターノの批判に回答するかたちで、その改訂版(1920年)——以下では、この第2版を〈倫理論文〉と略記する——に書き加えた、次のヴェーバーの指摘に明確にあらわれている。「非合理的」というのは、そのもの自体としていわれているわけではなく、つねに特定の「合理的」な立場からして、いわれているのだ。無信仰者からすれば一切の宗教生活は「非合理的」だし、快樂主義者からすれば一切の禁欲生活は「非合理的」だが、それらも、それ自身の究極の価値からすればひとつの「合理化」でありうる。この

---

ズムの諸信団と資本主義の精神」、そして「世界宗教の経済倫理」の「序論」「儒教と道教」「中間考察」が収められた。「世界宗教の経済倫理」は、中間考察のあとに「ヒンドゥー教と仏教」「古代ユダヤ教」とつづくが、これらは、すでに雑誌に掲載されていたものがそのままそれぞれ『宗教社会学論集』第2巻・第3巻としてヴェーバーの死後に刊行され、第3巻には付録として遺稿の「パリサイびと」も加えられた。ヴェーバーは、原始キリスト教、カトリック、イスラームなどに関する研究も進めていたが、それらはいずれも遺稿にとどまった(吉田 2016c: 1-2)。

<sup>2</sup> ヴェーバーは、「儒教と道教」の総括部分で、宗教における合理化を、脱呪術化と現世にたいする倫理的関係の組織化・統一化という2つの基準における程度から判別しようとする。この文脈では、呪術はそれ自体合理的でない宗教のあり方の最たるものということになる。しかし、一方、おなじ「儒教と道教」で、そうした非合理的なものがその論理の中で合理化していく過程を観察することも可能であると述べ、「中国における、すべての種類の合理化は、呪術的な世界像の方向に動いてきた」と述べる(ヴェーバー 1971(1947/1915-1919): 324-334, 377)。

論考が何か寄与するところがあるとすれば、この一見一義的にみえる「合理化」という概念が、実は多種多様な意義をもつものだとすることを明らかにしていることだろう(ヴェーバー 1989(1920):49-50; cf. 折原 2005:183)。また、「宗教社会学論集 序言」にも、次のような記述がある。「この「合理主義」なる語は…きわめてさまざまな意味に解することができる。たとえば、神秘主義的瞑想の「合理化」という語法があるが、この場合には、生の他の諸領域から見ればすぐれて「非合理的」な行動様式を指すものでありながら、しかも経済・技術・学問研究・教育・戦争・司法・行政などの合理化の場合とおなじように、合理化と呼ばれるわけである。さらにまた、それら生の諸領域のすべてにおいては、それぞれのさまざまな究極的観点ないし目標の下に「合理化」が進行しうるのであるが、その場合、ひとつの観点からみて「合理的」である事柄が、他の観点からみれば「非合理的」であることも可能なのである」(ヴェーバー 1972a(1920-1921):22)。さらに、「世界宗教の経済倫理」の「序論」や「社会学の基礎概念」でも、合理主義の多様な実態や合理化概念の多義性が指摘されている(ヴェーバー 1972b(1920-1921):81-82, 1972d(1922):49)。

このように、合理化は本来多義的なものであって、ある視点からの合理化が別の視点からの非合理化と表裏一体であるというこの点こそ、ヴェーバーの合理化概念あるいは『宗教社会学論集』の肝に当たる論点であると考えられる。しかしながら、先行研究において、この点をもつ理論的意義は、かならずしも十分評価されていなかったように思われる。

## 2. パラドクスの脱パラドクス化

さて、以上の整理と考察から、合理化概念をめぐる3つの論点を導き出すことができる。第1は、本稿の冒頭で触れた形式論的で抽象的な水準における合理化概念の定義を踏まえつつも、ヴェーバーが論じたようなそれぞれの具体的な合理化の諸様相ないし諸現象のあり方に関する記述と整理が、歴史研究あるいは民族誌的研究においては肝要となるであろうという点である。これについては、すでに拙論で論じた(吉田 2016c)。

第2は、後者の具体的な合理化のあり方を主題化する水準に定位した場合、合理化概念を一般論的な視点から定義しようとすることは、論理的な自家撞着に陥るであろうという点である。なぜなら、定義し概念を明瞭化すること自体、ひとつの合理化であると考えられるからである。ただし、このパラドクス、あるいは概念の次元における自家撞着の問題については、現代の代表的なヴェーバリアンのひとりであるルーマンが、ひとつの解答を与えているように思われる。

第3は、複数の異なる合理化がそれぞれ進行していけば、現実の社会・歴史過程において両者がぶつかり合ったときに葛藤をもたらすだろう、ということである。本稿では、この現実の次元における異質な複数の合理化——たがいににとっては非合理化となる——の間の葛藤に、焦点を当てたい。この問題については、シュルプターやアイゼンシュタットがそれぞれ議論を展開しており、これについて、節をあらためて検討を加えることにする。

その前に、第2点として挙げた、論理的な自家撞着について、論点整理をしておこう。

パーソンズの社会システム理論を独自の視点から彫琢したルーマンは、システム合理性や、合理性のゼマンティックが近代西洋において解体されていく過程には論及するものの、合理化という概念そのものについては明確な議論を提示していない。しかしながら、彼のいう「パラドクスの脱パラドクス化」は、ここで問題としている合理化概念のもつ自家撞着を解きほぐす論点となっていると考えられる。要は、この概念の次元における自家撞着は、ルーマンのいう第二次観察の水準——ルーマンは、オブジェクトレベルとメタレベルにある観察を、それぞれ第一次観察（ファーストオーダーの観察）と第二次観察（セカンドオーダーの観察）と呼ぶ——における、ある意味では机上の論理の産物であるといつてよいものである、という点にある。第一次観察の次元において、社会に生きる人々は、たとえある合理化がある非合理化と裏腹であると知っていても、その時点でより合理性に富むと解釈しうる何らかの対処の方途を選択し実践するのが通常である。そうした目的合理的行為以外の選択も、もちろんある。何もしないゼロオプションも、やはりひとつの選択である。ただ、いずれであれ、人々は、この論理的な次元におけるパラドクスを特定の観察の立場から特定の選択的行為を通して脱パラドクス化するという不断の営為をつづける。そうした不断の営為——ルーマンのいうオペレーション——の継起が社会の存続を構成するのである（という観察が、第二次観察つまりは社会学的な観察となる）。このように、ルーマンの自己言及論的システム理論は、ヴェーバーが言語化しなかった認識を明確化したものであって、ある特定の主体に即して合理化や非合理化のあり方を記述する上での、オブジェクトレベルとメタレベルの2つの次元を同時に示したものと捉えることができる。この2つの次元の区別こそ、この自家撞着あるいはパラドクスからの社会学理論的な脱出への契機となるのである（ボルフ 2014 (2011) : 113-145; コリンズ 1988 (1986) : 117-133; ルーマン 1990 (1968) , 1993 (1984) , 1995 (1984) , 1996 (1990) , 2009a (1997) , 2009b (1997) ; 長岡 2006: 645-663; ヴェーバー 1972c (1920-1921) : 112, 1989 (1920) ; 吉田 2005: 61-63)。

ただ、歴史研究の次元にあるといえるヴェーバーの議論に即すならば、より重要なのは、後者の現実の次元における複数の合理化のぶつかり合いをめぐる問題であろう。では、次節でこれについて論点整理をすることにしよう。

### 3. 複数の合理化のぶつかり合い

ある視点からの合理化が別の視点からの非合理化でありうるとするヴェーバーの視点に立てば、現実の歴史過程における異質な複数の合理化の徹底は葛藤やぶつかり合いをもたらすことになる。これについて、ヴェーバー、そしてのちのヴェーバリアンは、どのように考えていたのだろうか。

まずはヴェーバーである。ヴェーバー自身は、こうしたぶつかり合いを積極的に評価する視点を提起する。合理化の過程は、ひとつの合理主義だけでは徹底されない、むしろあ

る観点からみた場合の合理化がそれにとっての非合理的なものを取り込み利用することでいっそう展開する、というのである。この論点が先鋭的なかたちで示されるのが、ヴェーバーの死後に夫人らにより整理され、『経済と社会』に収められた「音楽社会学」である。ヴェーバーによれば、音楽の合理化は、それ自体のうちに非合理的な要素を内在させている。そもそも、音楽あるいは広く芸術は、審美性が支配的であるという点で非合理的な性格を有するが、むしろそれゆえに、そこには西欧の合理化の過程がもっともクリアなかたちで見出せるのである。また、「世界宗教の経済倫理」では、宗教の合理化と世俗の合理化とが有機的に結び合った近代西洋と、両者がむしろ乖離したかたちで合理化や非合理化が進行したといえる他地域の類例とが、比較検討されている。「音楽社会学」と、「世界宗教の経済倫理」あるいはこれを含む『宗教社会学論集』とは、それぞれ西欧の内と外における非合理的なものの合理化を論じたものと捉えることが可能である(安藤 1966a, 1966b, 1967; 和泉 2003: 24-69, 79, 108; 望月 2009: 199-203; 中村 2000; シェルフター 2009 (1988) : 75-77; 寺前 2010; ヴェーバー 1967 (1921) : 22, 1971 (1947/1915-1919) : 379-380)。

シェルフターは、この「音楽社会学」および『宗教社会学論集』の諸論から、ある合理化の過程の進展は、一方でその合理化と矛盾する事態を惹起したりそれを内に取り込んだりし、それが次の創発的な水準における合理化の展開をもたらす、という論点を抽出する。そして、これを「合理化のパラドクス」と呼び、ヴェーバー合理化論の注目すべきポイントと位置づける。たとえば、近代西欧音楽は、和音和声法にもとづく合理化を進めたが、そこに旋律的間隔原理による整律という別種の合理化の原理が結びつき、これによって新たな近現代の音楽のいっそうの展開をもたらされた。また、宗教の合理化のひとつのあり方として、永遠なる持続や超越的な神と秩序の観念そして彼岸的救済志向を強化するという方向性があるが、こうした彼岸的傾向を強めた宗教の合理化を徹底させたプロテスタンティズムの倫理から、逆説的にも、もっとも現世の合理化を推し進める近代資本主義の精神が発展していった。ヴェーバーにとって、合理化とは、ひとつの合理化の過程が単線で進行するものではなく、その中に非一貫性を抱えていたり、それと相矛盾する別種の合理化との交差によってむしろ進捗するものであったりする、というのである(安藤 1966b; 和泉 2003: 59-69; シェルフター 1990 (1988) : 179-182; ヴェーバー 1972c (1920-1921) : 106-107, 152-154, 1976 (1972/1922) : 160)。

もっとも、私見では、シェルフターのいう合理化のパラドクスは、かならずしもパラドクスという概念の適切な用法に沿ったものとはいえない。和泉もいうように、非合理性あるいは矛盾や非一貫性という障害が克服され、さらなる合理化が進展するという、いわば予定調和的な弁証法の論理の中に回収される事態を、パラドクスという語で呼ぶ必要はないからである(和泉 2003: 66)。むしろ、それは、前節で言及したルーマンの表現をもちいれば、合理化のパラドクスの脱パラドクス化であると理解されるべきものである。また、そもそも、ヴェーバー自身、そうした予定調和的な論理の中でのみ合理化と非合理化との関係を捉えていたのではない。たとえば、〈倫理論文〉は、近代西欧におけるもっとも包括的かつ徹底的に進行した合理化の帰結が、人間性を疎外し管理下におくもっとも非合理的なコスモスたる「鋼鉄の檻」である、という指摘で締めくくられている。ヴェーバーは、

マルクスのようにそれを揚棄する方法を探求しようとはしなかったが、合理化が有するポジティブ／ネガティブの両価性に冷静かつシニカルに向き合っていたと考えられる（ヴェーバー 1989（1920）：365-366; cf. 中岡 2003（1996）：156-157; 山之内 1997）。

私は、この点で、ある観点からは合理化とみなしうるものが別の観点からは非合理化であるという、まさにパラドクスとしかいえないこの両義性こそ、ヴェーバーの価値自由な文化科学としての合理化論（cf. 吉田 2016c）からまづもって導き出すべきポイントであるとする。われわれの生きる社会的空間には、たしかに均質・統合・調和に向かう局面もあるが、他方では、マルクスとマルクス主義者が注目したような、不均衡・支配・抑圧に向かう局面もまたあると考えざるをえない。シュルプターのように、合理化のパラドクスを穏当な弁証法的止揚へと回収してしまう視点からは、後者の局面を捉えることはおよそ不可能であろう。複数の合理化のぶつかり合いが葛藤をもたらす可能性を含めたところで、合理化のパラドクスという概念の含意を確保しておく必要がある。別言すれば、概念あるいはシステム理論の第二次観察の次元では、論理的なパラドクスはつねにすでに行為のオペレーションの継起によって脱パラドクス化されていると考えることはできるが、他方で、経験的な歴史社会の事象次元あるいは第一次観察の次元では、ある観察にとっての合理化のパラドクスはつねに脱パラドクス化されるとはかぎらず、パラドクスのままであったり、場合によっては脱パラドクス化されたものが再パラドクス化したりすることもありうる、というようにである。

こうした視点とりわけ後者の次元により重きをおく立場に立つならば、そうした合理化のパラドクスは社会的現実においてむしろありふれているということになる。ただ、そのことについて論じる前に、シュルプターとはまた異なる視点から合理化のパラドクスに相当する論点を組み込んだ、アイゼンシュタットの文明論について確認しておくことにしたい。

まず、簡単に彼の議論の概略を押さえておこう。アイゼンシュタットは、ヴェーバーが論じた彼岸的救済傾向の強化という合理化の過程と、それが世俗生活の合理化に与える影響関係を、「超越的秩序と現世的秩序の根本的緊張」として再定式化し、これがヤスパースのいう「枢軸時代」の諸文明——具体的には、古代イスラエル、古代ギリシア、キリスト教、ゾロアスター教、中国、ヒンドゥーと仏教、そしてイスラーム——において終わらない変動のポテンシャルティを創出する、とする。この枢軸時代の諸文明にたいし、モダニティは別種の独自の文明とみなされ、「第二の枢軸時代」と定位される。キリスト教西欧文明から生まれたこの文明は、人間の歴史においてははじめて、現世的秩序の中での意識的な行為を通じて超越的秩序と現世的秩序とを架橋するという信念を確立し、軍事的・経済的・技術的・イデオロギー的にグローバルに拡張していった。その過程——それは、まさに脱パラドクス化の世界展開の過程にほかならないといえる——においては、部分的に反西欧的・反近代的な色調を帯びる局面も出現するが、その場合もそこにモダニティの様相を看取することは可能であり、モダニティという文明のグローバルな拡散は、逆説的にも多元的なモダニティを胎動させた、とする（アイゼンシュタット 1991a（1987）, 1991b（1983）, 2003, Eisenstadt 2002（2000）; ヤスパース 1964（1949）; 望月 2009: 203-212, 219-226）。

このように、アイゼンシュタットの議論は、ヴェーバー以降の知見を取り込みつつ、ヴェーバーの問題設定を組み替え、宗教と世俗の2つの合理化の進行のせめぎ合いを文明発展のダイナミズムへと結びつけたものとなっている。しかしながら、シュルプターと同様に、この議論も、合理化のパラドクスの統合的的局面や正機能的側面に注目したものであって、社会的空間の不均衡性に即して合理化のパラドクスを捉えたものとはいえない。たとえば、「第二の枢軸時代」の植民地体制下においては、土着の社会において支配的な宗教が提示する世界像と、宗主国側の社会において支配的な宗教が提示する世界像とがぶつかり合うことは、ままある。その場合、前者の世界像の中にも、ある価値観点からはそれなりに合理化を遂げているとみなしうるものはあるだろう。しかし、おおくの場合、植民地体制下において、前者は非合理的というラベリングを一方的に付与され、ときに後者によって駆逐され、人々は改宗を迫られることになる。世界像と世界像の間の闘争ばかりではない。前者の土着の超越的な秩序は、宗主国側が立ち上げる政治的社会的秩序の影響によって変更を迫られることもある。このように、アイゼンシュタットがいう「超越的秩序と現世的秩序の根本的緊張」は、決してフラットな次元にある二元的原理なのではない。超越的秩序も現世的秩序も、ある種の権力関係を内包した、多次元的でいびつな社会的空間の中で複雑に闘争し合うものとして、理解されるべきである。そうした具体的状況——たとえば、植民地時代における現地社会の側と宗主国の側それぞれにとって意味ある、異なる合理化がどのようにぶつかり合ったりたがいに影響し合ったりしたのか——を詳細に記述した民族誌は、歴史人類学の分野を中心に相当な蓄積がある(ex. 春日 2001; 永淵 2007; 坂井 2003; Schulte Nordholt 1996; Vickers 1989 (2000))。同様の構図は、ポスト植民地時代における少数民族と多数派民族との間にも見て取ることもできよう。アイゼンシュタットはそうした議論との接合をはかろうとしてはいないが、現実の次元における合理化のパラドクスの持続/脱パラドクス化/再パラドクス化の、各地域・時代における固有なあり様の記述に照らしつつ、アイゼンシュタットの静態論的モデルをボトムアップでマイクロな視点から動態論化させ組み換えていく議論可能性は、残されていると考えられる。

さて、ここで先の論点に戻ろう。シュルプターがいう合理化のパラドクス、あるいは正確に言えばパラドクスの脱パラドクス化——アイゼンシュタットは、世俗と宗教の2つの次元が織りなす文明の動態論というモデルにおいてこれを再定式化しているといえる——は、よりマイクロな次元を含めて、われわれの生活のさまざまなところに見出すことができる。たとえば、政策面でおおきな隔たりがある政党同士が、議会での議席過半数確保を目的に連立政権を組むことがあるが、そうした政治理念上は非合理的あるいはパラドキシカルといえる連立が、結果的に比較第一党の主義主張を緩和しより広い支持層から受け入れられる政策実施をもたらすことはある。新しい「血」が加わることで組織が活性化するという事態も、ヴェーバーやシュルプターが主題化したメカニズムのひとつのあらわれといえる。組織や集団にとっての異質なものの介在が当の組織や社会を活性化するという点は、山口昌男がかつて象徴・世界観研究において注目した、負や悪の価値を帯びた周縁が正しく聖なる中心を活性化するという論点とも重なる(山口 1975, 1983, 1990(1979/1971))。また、藏本は、ミャンマーの仏教組織を主題とした研究の中で、経済に否定的な倫理の彫琢という合理化を宗教組織が実践する過程において、経済的合理化を一定程度は果たさな

ければ当の組織が維持存続できないというパラドクス——藏本自身は「宗教的理想と経済的現実のジレンマ」と定式化する——について論じている（藏本 2014: 8-9, 266）。宗教組織にかぎらず、現代社会における非営利組織一般は、おおかれすくなかれ、本来の目的である非営利活動の追求と、組織の経済基盤の確保という、一見すれば相容れないもの間を調停・調整する、パラドクスの脱パラドクス化を果たさなければならない（ボーモル&ボウエン 1994 (1966) ; 池上 1998; 寺田 2016: 15, 50-82; 吉田 n.d.)。

ここで重要なのは、先の議論で示したように、この現実の次元における脱パラドクス化は、あくまである観察にもとづく評価なのであって、別の観察にもとづけば、おなじ事態はパラドクスや矛盾の単なる繰り延べや露呈、あるいは拡大や再パラドクス化にほかならない、という点である。たとえば、沖縄本島の米軍基地の存続は、ある第一次観察の立場からは（国家の外交・防衛上の）問題の解消や低減に向けての対処として評価され、別の観察の立場からは（地域社会に生きる人々の生活や人権に関する）問題の放置や悪化として評価される。ある社会過程が脱パラドクス化なのか再パラドクス化なのかは、観察の視点によって異なる評価となる。ただ、当該組織やこれを含む社会全体が存続しおおむね機能しているというこの点に照らせば、一般に社会過程はパラドクスの脱パラドクス化の連鎖からなっていると——第二次観察からは——みなすことができる、ということにすぎない（馬場 2015: 408-411; ルーマン 1993 (1984) , 1995 (1984) , 2003 (1992) , 2007 (1986) , 2014 (1991) ; 高橋 2013; 友枝 2013)。いずれにせよ、われわれの社会は、さまざまな潜在的なパラドクスと、ある第一次観察からみたそのパラドクスの持続／脱パラドクス化／再パラドクス化の過程の中にある。そして、それを一定の範囲で、特定の複数の主体のそうした第一次観察のあり方に即して記述していくことが、人類学的研究の主題となるのであろう。

以上、ヴェーバー、シュルプター、アイゼンシュタットの議論を一瞥し、合理化のパラドクスに関わる論点を整理してきた。あらためてこれを6つの点にまとめよう。①ヴェーバーは、ある合理化にとっての非合理的なものが当の合理化の触媒となったり、ある合理化の進展がその内部に当の合理化にとっての非合理的なものを必然的に含んだりする、と考えていた。②シュルプターは、ここから、異なる合理化がたがいに共振し合うことによって、より高次の合理化の進展が果たされるという論点を抽出し、これを「合理化のパラドクス」と呼んだ。もっとも、彼のいうパラドクスは、予定調和的な合理化の収束を前提とした概念となっている。むしろ、合理化のパラドクスは、ある社会においては永遠に継続するものでありうる。③アイゼンシュタットは、まさにそのような視点から、「超越的秩序と現世的秩序の根本的緊張」という定式化によって、宗教と世俗の2つの合理化の緊張関係を文明発展の駆動力とみなし、それぞれの文明における宗教の合理化と社会・政治・経済などの合理化とのダイナミズムを描こうとした。ただし、たとえば植民地支配下の権力関係においては、ある事象が一方向的に合理的であるとされたり非合理的であるとされたりするのであって、そうした主体の間の差異や葛藤は彼の文明論において主題化されえない。④また、文明論の次元ばかりでなく、われわれの日常生活の次元において、パラドクスの脱パラドクス化に相当する事態はありふれているという点もある。⑤人類学や社会学の研究において重要なのは、第一次観察の次元における特定の主体のまなざしとの関連に



において、個別社会の合理化の具体的状況——合理化のパラドクスの持続、脱パラドクス化、あるいは再パラドクス化などのさまざまな具体的あり方——を叙述する作業である。⑥その叙述においては、支配の不均衡性にたいする目配りが必要となる。シュルプターやアイゼンシュタットも、またヴェーバーも、権力や支配の不均衡性を合理化論あるいは合理化のパラドクス論の中に組み込んでいない。いわば合理化の歴史学を支配の社会学化することこそ、必要なのである。

#### 4. おわりに

本稿では、ヴェーバーの合理化概念の最重要のポイントが、ある視点からの合理化が別の視点からの非合理化と表裏一体であるという点に存すると考える観点から、2つの論点へと議論を展開し考察を加えた。ひとつは、合理化概念を一般論的な視点から定義しようとするのが論理的な自家撞着に陥るのではないかという点であり、これをルーマンのパラドクスの脱パラドクス化という論点に照らして、まさに脱パラドクス化して理解しようとした。いまひとつは、現実の社会・歴史過程において複数の異なる合理化がそれぞれ進行しぶつかり合うのではないかという点であり、これについては、ヴェーバー、シュルプター、アイゼンシュタットの議論を整理しつつ、個々具体的な合理化の状況——それは、主体によって、合理化のパラドクスの持続として捉えられたり、脱パラドクス化として捉えられたり、再パラドクス化として捉えられたりする——を記述的に理解することと、合理化の歴史学を支配の社会学化することとの必要性を、確認するにいたった。

ヴェーバーの合理化概念は、こうした2つの次元においてパラドキシカルであるとともに脱パラドキシカルな構えを有するものである、と捉えることができる。本稿は、圧縮した表現をすれば、この合理化の非合理性という論点について、若干の考察と論点整理を試みたものである。私は、さらにこの論点を、再帰的近代におけるリスク社会化という論点に接続できるのではないかと考えている。これは、別稿であらためて検討することにした。

附記 本研究は、南山大学パツへ研究奨励金 I-A-2 (2017年度) の研究助成を受けたものである。

#### 参考文献

(日本語文献)

アイゼンシュタット、シュメル・ノア

1991a (1987) 『文明としてのヨーロッパ——伝統と革命』、内山秀夫訳、刀水書房。

1991b (1983) 『文明形成の比較社会学——ヴェーバー歴史理論の批判的展開』、梅津

順一・小林純・田中豊治・柳父圀近訳、未来社。

安藤 英治

1966a 「マックス・ウェーバーの「音楽社会学」をめぐって」『成蹊大学政治経済論叢』  
16巻1号: 141-164。

1966b 「マックス・ウェーバーの「音楽社会学」をめぐって (続)」『成蹊大学政治経済  
論叢』16巻2号: 254-283。

1967 「マックス・ウェーバーと音楽」、マックス・ウェーバー、『音楽社会学』、pp.  
243-278、創文社。

池上 惇・植木 浩・福原 義春

1998 「文化経済学の拓く世界」、池上惇・植木浩・福原義春編『文化経済学』、pp. 1-23、  
有斐閣。

和泉 浩

2003 『近代音楽のパラドクス——マックス・ウェーバー『音楽社会学』と音楽の合理  
化』、ハーベスト社。

ヴェーバー、マックス

1967 (1921) 『音楽社会学』、安藤英治・池宮英才・角倉一朗訳、創文社。

1971 (1947/1915-1919) 『儒教と道教』、木全徳雄訳、創文社。

1972a (1920-1921) 「宗教社会学論集 序言」、『宗教社会学論選』、大塚久雄・生松  
敬三訳、pp. 3-29、みすず書房。

1972b (1920-1921) 「世界宗教の経済倫理 序論」、『宗教社会学論選』、大塚久雄・  
生松敬三訳、pp. 31-96、みすず書房。

1972c (1920-1921) 「世界宗教の経済倫理 中間考察——宗教的現世拒否の段階と方  
向に関する理論」、『宗教社会学論選』、大塚久雄・生松敬三訳、pp. 97-163、みす  
ず書房。

1972d (1922) 『社会学の根本概念』、清水幾多郎訳、岩波書店。

1976 (1972/1922) 『宗教社会学』、武藤一雄・菌田宗人・菌田担訳、創文社。

1980 (1919) 『職業としての学問』、尾高邦雄訳、岩波書店。

1988 (1951/1922/1903-1906) 『ロッシャーとクニース』、松井秀親訳、未来社。

1989 (1920) 『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』、大塚久雄訳、岩波  
書店。

2009 (1921) 『ヒンドゥー教と仏教——宗教社会学論集 II』、古在由重訳、大月書店。

折原 浩

2005 『ヴェーバー学の未来——「倫理」論文の読解から歴史・社会科学の方法会得へ』、  
未来社。

春日 直樹

2001 『太平洋のラスプーチン——ヴィチ・カンパニ運動の歴史人類学』、世界思想社。

藏本 龍介

2014 『世俗を生きる出家者たち——上座仏教徒社会ミャンマーにおける出家生活の民  
族誌』、法蔵館。

コリンズ、ランドル

1988 (1986) 『マックス・ウェーバーを解く』、寺田篤弘・中西茂行訳、新泉社。

坂井 信三

2003 『イスラームと商業の歴史人類学——西アフリカの交易と知識のネットワーク』、世界思想社。

シュルプター、ヴォルフガング

1990 (1988) 『ヴェーバーの再検討——ヴェーバー研究の新たなる地平』、河上倫逸編、井上琢也・今井弘道・嘉目克彦・佐野誠・溝部英章訳、風行社。

2009 (1988) 『マックス・ヴェーバーの研究戦略——マルクスとパーソンズの間』、佐野誠・林隆也訳、風行社。

高橋 徹

2013 「機能分化と「危機」の諸様相——クライシスとカタストロフィーの観察」、高橋徹・小松丈晃・春日淳一『滲透するルーマン理論——機能分化論からの展望』、pp. 181-212、文眞堂。

寺田 良一

2016 『環境リスク社会の到来と環境運動——環境的公正に向けた回復構造』、晃洋書房。

寺前 典子

2010 「楽器と音律の合理化における〈身体感覚〉の変遷——マックス・ウェーバー『音楽論』再考」『慶応義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究』70号: 73-90。

友枝 敏雄

2013 「第二の近代と社会理論」、宮島喬・船橋晴俊・友枝敏雄・遠藤薫編著『グローバルゼーションと社会学—モダニティ・グローバリティ・社会的公正』、pp. 163-182、ミネルヴァ書房。中岡 成文

2003 (1996) 『ハーバーマス——コミュニケーション行為』、講談社。

中村 雄二郎

2000 『精神のフーガ——音楽の相のもとに』、小学館。

長岡 克行

2006 『ルーマン／社会の理論の革命』、勁草書房。

永渕 康之

2007 『バリ・宗教・国家——ヒンドゥーの制度化をたどる』、青土社。

馬場 靖雄

2015 「訳者あとがき」、ニクラス・ルーマン、『社会の道德』、馬場靖雄訳、pp. 406-414、勁草書房。

ボーモル、ウィリアム・J、ウィリアム・G・ボウエン

1994 (1966) 『舞台芸術——芸術と経済のジレンマ』、池上惇・渡辺守章訳、芸団協出版部。

ボルフ、クリスティアン

- 2014 (2011) 『ニクラス・ルーマン入門——社会システム理論とは何か』、庄司信訳、新泉社。
- 望月 哲也
- 2009 『社会理論としての宗教社会学』、北樹出版。
- ヤスパース、カール
- 1964 (1949) 『歴史の起源と目標』、重田英世訳、理想社。
- ルーマン、ニクラス
- 1990 (1968) 『目的概念とシステム合理性——社会システムにおける目的の機能について』、馬場靖雄・上村隆弘訳、勁草書房。
- 1993 (1984) 『社会システム理論 (上)』、佐藤勉監訳、恒星社厚生閣。
- 1995 (1984) 『社会システム理論 (下)』、佐藤勉監訳、恒星社厚生閣。
- 1996 (1990) 『自己言及性について』、土方透・大沢善信訳、国文社。
- 2003 (1992) 「非知のエコロジー」、『近代の観察』、馬場靖雄訳、pp. 109-167、法政大学出版局。
- 2007 (1986) 『エコロジーのコミュニケーション——現代社会はエコロジーの危機に対応できるか?』、庄司信訳、新泉社。
- 2009a (1997) 『社会の社会 1』、馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳、法政大学出版局。
- 2009b (1997) 『社会の社会 2』、馬場靖雄・赤堀三郎・菅原謙・高橋徹訳、法政大学出版局。
- 2014 (1991) 『リスクの社会学』、小松丈晃訳、新泉社。
- 矢野 善郎
- 2003 『マックス・ヴェーバーの方法論的合理主義』、創文社。
- 山口 昌男
- 1975 『文化と両義性』、岩波書店。
- 1983 『文化の詩学 I・II』、岩波書店。
- 1990 (1979/1971) 『人類学的思考』、筑摩書房。
- 山之内 靖
- 1997 『マックス・ヴェーバー入門』、岩波書店。
- 吉田 竹也
- 2005 『バリ宗教と人類学——解釈学的認識の冒険』、風媒社。
- 2013 『反楽園観光論——バリと沖縄の島嶼をめぐるメモワール』、樹林舎。
- 2016a 「楽園観光地の構造的特徴——シミュラクル、脆弱性、観光地支配」『島嶼研究』17巻1号: 1-20。
- 2016b 「地上の煉獄と楽園のはざま——沖縄本島南部の慰霊観光をめぐる」『人類学研究所研究論集』3号: 41-94。
- 2016c 「ヴェーバー合理化論の基盤認識と人類学——客観性・因果連関・歴史の叙述」『南山大学紀要アカデミア 人文・自然科学編』12号: 1-21。
- 2016d 「バリ宗教の合理化論をめぐる再検討——ギアツからヴェーバーへ」『文化人類

学』81卷2号:302-311。

n.d. 「ひとつになった乙姫と白百合の現存在——恒久平和を念願する時限結社の超越の過程」『人類学研究所研究論集』次号掲載予定。

(英語文献)

Eisenstadt, Shmuel Noah

2002 (2000) "Multiple Modernities," In Shmuel Noah Eisenstadt (ed.) *Multiple Modernities*, pp. 1-29, New Brunswick & London: Transaction Publishers.

2003 "The Civilizational Dimensions in Sociological Analysis," *Comparative Civilizations and Multiple Modernities*, Part 1, pp. 33-56, Leiden & Boston: Brill.

Schulte Nordholt, Henk

1996 *The Spell of Power: A History of Balinese Politics 1650-1940*, Leiden: KITLV Press.

Vickers, Adrian

1989 (2000) *Bali: A Paradise Created*. Singapore: Periplus Editions. (『演出された楽園——バリ島の光と影』、中谷文美訳、新曜社。)

### Key words

ambiguity of rationalization, de-paradoxization of paradox, conflict among heterogeneous rationalizations